

## Special Essay

## 人生の友「私の100冊」

内科学講座（心臓・血管内科部門） 福本 義弘

これまで、学生時代を含めると10数回の引っ越しを経験した。都度困ったのは、増える一方の本の引っ越しであった。いつかまた読もうと手放すことをせずにいたが、昨年、久留米大学への着任に際し引っ越し際、その大半を処分した。あるコラムがきっかけである。

そこには、「人生において、特に老後に向けて、吟味した選択により自分の手元に100冊の本を残そう」とあった。それまでの私は、気に入った作家のものはとりあえず買い、出張のたびについで売店で買い、家族の買物を待つ間に買い・・・と、いつも特に深い意味を持たないことが多かった。子供の頃から地元の図書館で本を読みあさり、在学していた九州大学の医学図書館では試験の度に勉強していた。これまで、医学書はもちろん、ハウツウもの、歴史小説、哲学書などから多くのヒントを得て、その時々で本に助けられこれまできたが、このコラムとの出会いをきっかけに、本当にそれが自分にとって必要か否かを深く考えると、「座右の銘」ならぬ、「座右の書物」は以外に少ないものであった。そこで大半の書物を処分することとなった。

昨今、電子媒体でスマートに読書を楽しむことのできる時代、繰り返し読むならなおさら、本には手が伸びない。しかし、面白いことに、いざ残そうとする本は、これまで何度も読んだ背表紙が色あせた本であり、ページをめくったあたりが黄ばんでいるものばかり。私の人生を大きく変えたわけでもなく、人に勧めるにふさわしい、たいそう高尚なものでもなく、しかしそれは、自分にとって心地いいのである。なぜか？ 自己の考えが同じであると再認識し安堵する時間を提供してくれるものだからである。あるいは、自己を奮い立たせる、以前読んだ当時の思い出や、その時の心の内までも思い出させる、まさに、自分史に寄り添うものばかりなのである。これらは、必ずしもこの先、手元に残されるとは限らない。しかし、今一度読んだとき、はたして自分は同じ考えでいるのか、さらに新しい何かを見つけるのか・・・そんな楽しみをも所持している。

特に、最近の医学論文や医学書は電子媒体で読むことが多くなったが、紙媒体の医

学書ももちろん残っている。その中に、たいそう分厚い循環器バイブルで、これからも決して手放さないものがある。なぜかと言えば、アメリカ留学中の恩師のサインがあるからだ。これは、電子ブックでは叶わない、「本」だからこそである。留学中、図書館の静寂の中で、何をめざし、どんな友人がいて、どんな生活をしていたのか、図書館のにおいまでも思い出させてくれ、私を当時に連れて行く。久留米大学医学図書館も、多くの蔵書を持ち、学生たちで賑わっている。時々私も、人生の友となる1冊に出会う為、静寂の中に佇んでみよう。

